

Title	「パガンの滅亡」
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 18 p.67-p.82
Issue Date	1968-01-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80298
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「パガンの滅亡」

服 部 正 一

နိ ခါနိ:

ကောင်း စား ခြင်း ၊ ဆင်း ရဲခြင်း ၊ တိုး တက်ခြင်း ၊ ပျက်စီး ခြင်း တို့ မှာ လောကတွင် ဖြစ်တတ်သည့် ဓမ္မတာတရား ပင် မဟုတ်ပါလော။ အနေ၌ ရသေ့ မင်း စော ဆောက်တည်ခဲ့သော ပုဂံမြို့သည်လည်း နောက်ဆုံး ၌ ပျက်စီး ချီမြို့ ဟောင်း ဘဝသို့ ရောက်ရလေပြီတကား ။

ကျွန်တော်သည် နှစ်ဆောင်း ပါး ၌ " ဂဏ္ဍတို " (အတွဲ ၁၆) နှင့် (အတွဲ ၁၇) ၌ ရေး သား ခဲ့ဘူး သော " ပုဂံ ခေတ် " ကိုဆက်လက်၍ ရေး သား မည်ဖြစ်သဖြင့် " ပုဂံ ခေတ် ပျက်စီး ခမ်း " အမည်ဖြင့် ထပ် လောင်း တင်ပြအပ်ပါသည်။

ကျွန်တော်သည် ပုဂံမြို့ကြီး ၏ ပြုပြင်ချုပ်ချုပ်ကြောင်း ကိုအဖက်ဖက်မှ သုတေ သနပြုခဲ့ပါသည်။ ထို ခေတ်ကာလ ၌ ပေ T ပေါက်ခဲ့သော စာ ပေ ၊ ဘာသာစကား ၊ အလေ့အကျင့် ၊ တိုင်း ရေး ပြည်ရေး ၊ စီး ပွား ရေး စသည့် ယဉ်ကျေးမှု အမျိုး စုံတို့ကို ယခု ခေတ်ကာလ နှင့် စပ်စပ်ကြည့်၍ ယနေ့ မြန်မာ့ယဉ်ကျေး မှုတွင် မူရင်း တည်နေပုံကို လေ့လာသုံး သိရပါသည်။

၄င်း ပြင်တရပ်တို့ ၊ ဂွမ်း တို့ ၊ မွန်တို့ ၊ ကဲ့သို့ သောလူမျိုး များ နှင့် ပဒို ပဏ္ဍဖြစ်ခဲ့ပုံ ၊ အထူး သဖြင့် ဂွမ်း လူမျိုး များ ၏ တက်ကြွပုံ ၊ ထိုသို့ သော အဖြစ် အ ပျက်များ သည် နောင်အခါတွင် အရေး ပါအရသာ ရောက်သော အရှိန်တန်ခိုးကြီး ဖြစ်လာ ကြောင်း ကိုဆင်ခြင် ရေး သား ရပါသည်။ ။

ま え が き

「騙る平氏も久しからず」天の理法は如何んともし難く、アノーヤター王のきづいたパガンの都もついに廃落した仏塔の町と化す。本論文では学報16号の「パガン時代」、17号の「(続)パガン時代」の続編として「パガンの滅亡」と題し、パガン王朝の滅亡を種々な観点より考察し、当時の文学、言語、風俗、宗教、政治、経済等が現代ビルマ文化の基調をなしていることを見てゆ

こう。

なお、ビルマ人とタタール族、シャン族、モン族等の異民族との接触、殊に、シャン族の興隆はその次の時代への重大な影響を考えるべきである。

13世紀は、ヨーロッパにおいては中世キリスト教がその頂点に達した時期であり、東洋においてはジンギス汗及びその後継者 Ogdai 汗がカスピ海より支那海に及ぶ拡大なモンゴル帝国を建設していた時期でもあった。そしてヨーロッパのキリスト教国が彼らの脅威に曝され、ロシア、ポーランド等が侵略されていた。1242年、ジンギス汗の死によって彼らはようやくその危難から救われたが、彼の孫クブライ汗は東アジアに注意を集中し、1253年に雲南を併合し、1271年には自らを元と称して、中国を支配し、その四隣の国々を属国と見なし、使者を派して朝貢を要請した。そして、その余波はビルマにも及んだが、それがちょうどナラティハパテ王の時代に当るのである。

タタール族について

各々のビルマ史にしばしば出現する Tayot-Tayet と呼ばれるのはタタール族を指すものと考えられる。彼らはモンゴル民族に属し、蒙古の西北一帯に遊牧していた。マハー・ヤーザウインにはタタール族の軍を中国軍 (Tayot-sit-de) として記述されている。Tayot (中国) の語源が Turk より由来していると説く学者もある。〔「ビルマ史」アーサー・フェーヤー著；岡村武雄氏訳, 84頁〕。これは次のことから考察されたのであろう。ビルマ語の ၵ ၵ [Tarup] の末字の ၵ [p] は終子音の k, 即ち glottal stop に発音されるので Tarup (=Taruk) の形でビルマ語に入ったのではないかと考えられる。恐らく当時のビルマ人には彼らの人種的区別が判然としていなかったのではないだろうか。

彼らタタール族の故郷は Tartāri であった。即ち、今の Turkestan に当り、Tartāri という地方名より Tayet (<Tarek, 現代ビルマ語では r 音は y 音に発音され、語尾の k, 即ち、ビルマ文字の ၵ の舌の位置は t の位置に当る) になってきたと考えられる。従って、Tayot-Tayet = 中国 + Tartāri の意味である。

彼らは一定の場所に住居せず、羊、馬、牛、らくだ等を養育しながら各地に遊牧した。彼らの元来の宗教は仏教であったと云われているが、チベットのラマ教を信ずるようになったらしい。これら遊牧民であったタタール族の中から12世紀末にテムジン (Temujin) が彼らの長となり、部族を統一して、大汗の位につき、チンギス汗と称した (1206年)。これよりわずかの間にアジア中部及び東部を席卷し、1215年に中国の北部を占領し、ついで蒙古西部及びトルキスタン地方を戦い取った。チンギス汗は1227年、4人の息子を残して世を去る時、彼の領土を4人に分配した。ここに四汗国が出現して広汎な自治権をあたえられて支配した。彼ら4人のうちオグゴデ

ー (Otgode:, 又は Ogotai, 又は Ogdai Khan) には大汗の称号があたえられて四汗国 中本流の如き格式をもった。

オグゴデーは甥の1人に軍隊をあたえて西方の国々を攻めさせた。彼の軍は1237年、モスコーを占領し、つづいてドイツまで軍を進めた。1241年にはポーランド、ドイツ、ハンガリーを落とし、いった。当時ヨーロッパにおいては王と法皇の間に勢力争いが起っていて、それぞれの領土も分裂していた。同じ年の1241年にオグゴデーの死の報せが伝わりと同時にタタール族の軍はヨーロッパより退いた。

上述したテムジンの孫に当るクブライ汗は第4代の王となり、中国全土を支配した。彼の統治間、ビルマではナラティハパテ王の時代に相当するのであるが、クブライ汗は1254年に雲南地方のタリプーという所を占領した。1271年に国号を元と定めて、ここに元朝が成立した。異民族による中国支配として中国史に一特色を示すものである。それから引続いて同年に雲南政府をしてビルマに朝貢を要請せしめ、1273年にクブライ汗の書をもたせて元の使者をナラティハパテ王に送り、1277年には緬支間に「ンガサウンジャンの戦い」として知られている激戦が行われ、1283年にはパガンの運命をかけての大殺戮戦に至るのであるが、後に少し詳細に述べて見たいと思う。

ビルマ人史家による「ビルマ史」には年代において1年の相違が見受けられるものがあるが、それはビルマ暦（即ち、パガン暦）に638年を加えれば西暦の年代に相当するのであるが、その事件が1月1日より4月15日（ビルマの正月）までに起っていれば、639年を加えねばならないので、その点で1年の計算違いが起っているのかも知れない。それ以外の年代の違いに関しては、前述した通り（学報16号65頁）マンナン・ヤーザウィンではチャンジッター王の時代に20年間の誤りが生じており、ビルマの史家たちはマンナン・ヤーザウィンを資料としている人が多いので年号の上に相違があるものと解釈される。しかし、最近碑文の研究により漸次改められてきた。

対 中 国 戦

ナラティハパテ王は宰相ヤーザティンジャンをダラに追放したこと、過度に快楽に耽ったこと、政治を知らない者の言葉に耳を傾けたこと、処刑すべきでない人たちを処刑したこと、等これらのことのために国民のうちには王に対して尊敬を失う者が多くなり、王を支持するものと支持しないものの二派に分れた。また学ある者で長男のウザナーが支配するバセインへ身を寄せて行く者もあり、王の信用はますます地に落ちて行った。

このように国内において秩序が乱れかけた状態にあった上へ、今や中国全土を占領し支配していたタタール族の王クブライ汗は1271年雲南の太守を通じてナラティハパテ王のもとに先王の時

と同様に進具を続けるように要請してきた。それはアノーヤター王の時代に、金製銀製の食器類を中国の王に献上したことがあったことに言及しているのであろう。その理由は、ウ・オンマウンによれば、その頃、中国の商人が品物を牛車に積んでパガンの都へ交易に来ていたが、王はそれらの品物に従来よりも高い税を課した。このことに対して取られた処置である、と。

この事を伝えるためにパガンへ来た使者をナラティハパテ王は心よく迎えなかった。ハーヴィーでは、王はこの使者をいつまでも臣下の願使に委ねたまま待たせていたが、ついに近臣の一人を附してこの者を送り返し、以て友誼を表明し、北京にある仏牙に詣でしめた、と書かれている。ウ・オンマウンでは、一人の僧侶を中国へ使者としてつかわしたが、その僧侶は中国に達したけれどもクブライ汗に会えなかったのでビルマ王の意図を伝えることができないで、パガンへ帰ってきた。と述べられている。

1273年クブライ汗は再び使者を派遣した。その使者がもたらした文書には、もしビルマが中国と親密になりたければ、ビルマ国王の弟又は高官の一人を送るべきだということが書かれてあった。元史卷二百十「緬」の部には次の通り記されている。

「誠能謹事大之禮遣其子弟若貴近臣一來以彰我國家無外之義用敦永好時乃之休至若用兵夫誰所好王思之……」

その時の使者たちがナラティハパテ王の面前へ靴をぬがずに入り来たったという理由で王は一人残らず処断せよと命じた。この時、アナンタピッスイ大臣は冷静に王を戒めて、「使者は殺すべきではありません。それ程のことで死に価するものとも考えられません。もし彼らの行状が気に召さねば、中国の王に報告すればよろしい。」と言ったが、王は彼の言葉をきき入れず、彼らを処刑した。

そのことを雲南政府は中国のクブライ汗に伝えてビルマと戦うように刺戟した。ハーヴィーでは、雲南政府が北京に次のように報告したと述べられている。「使者帰らず。ビルマは明らかに従う意志なし。ビルマ王に解らせる唯一の方法は直ちにこれを討伐することである。」と。けれども、これに対してクブライ汗は他の政治問題もからんでいるので時期を待つようにと命令を下した。

しかるに、3度目、1277年にバモーの町より北へ70哩ほど距った所、タペイン河畔のカンゲ(Kan-nge)〔元史卷210では「金鹵国」となっている〕の領主が中国の配下に入ったことを理由にビルマ軍はその領主に戦いを挑んだ。彼はそこで中国の汗に授けを求めたので、クブライ汗は彼を救うべく命令を出した。ウ・オンマウンによれば、中国には折しもベニスの人マルコ・ポーロがこの戦いに参加していた、とのことである。

Colonel Yule の“Marco Polo”にも、また Arthur Phayre の“The History of Burma”にもマルコ・ポーロのこの戦闘に関する記事が紹介されているので、ここに述べよう。

マルコ・ポーロは激戦の行われた場所を永昌としているが、そこは Momien または騰越の東方4日の行軍で行けるところで、当時ビルマの前線基地であったようである。この戦闘とその予

備的行動について、マルコ・ポーロによれば、「きわめて強大な王」即ち、ビルマ王は大汗の軍隊がヴォチャン（永昌）にあると聞き、己の無智な野蛮さから彼に訓戒をあたえようと決意した。そこで彼は6万（ハーヴィでは約4万）の兵と多数の象や馬を引いて進軍したが、「ヴォチャンの丘」で Nasr-uddin 麾下のタタール軍により多数を殺害され敗北を喫した。ということである。

マルコ・ポーロはこの戦闘が1272年に起ったと記しているが、ほとんどの史家が一致して1277年としていることから察して明らかに1277年の間違いであろう。また、彼の記述の中には戦闘の場所に関してもう一つの誤謬のあることが認められる。これは戦いがタペイン河の丘陵地帯で行われたことから起ったもので、タペイン河の一支流の上流は永昌地域の境界に近かった。

王の命を受けたアナンダ・ピシーとヤンダ・ピシー兄弟の指揮するビルマ軍はタペイン川に沿ってバモー、カンツゲ等のンガサウンチャン地方にて中国側のタタール軍を向え戦った。

この戦闘においては、ビルマ軍の非正規の傭兵に対して、中国軍は正規の守備兵、即ちタタール軍で、前述の Tayot-Tayet と呼ばれる一流国の軍隊と対抗した経験のある軍隊で、これを引くのは猛将ナスル・ウデインであった。槍兵を満載したビルマ軍の象部隊はタタール軍の騎馬隊より弓矢の攻撃を受け、それを防ぐことができず、その上タタール兵の用いる *銃火器の音に驚いたビルマ軍の象隊はタタール兵の進撃に攻し切れず、退却せねばならなかった。この戦闘はビルマ人にはンガサウンチャン (Nga-hsaung-gyan) の戦いとして知られている。タタール軍はこの戦いが終ると、パガンにまで進軍せず、本国へ引き上げて行った。ビルマ人には一大激戦として映じたンガサウンチャンの戦いも中国側にとってはほんの辺境の一事件に過ぎないかのように思えたであろう。

*当時、この戦いにおいて中国軍が使用していた銃火器というのはビルマ語では Mi:-pauk-byauk といって、銃架に載せたまま発射する大型のジンガル銃で、火ざらの上の点火薬に火をつけて発射する。銀細工をほどこしたのもあったそうである。その後、ビルマでもそれが用いられるようになった。

Mandalay Mawkwon:, p.31にはその銃のことが記されている。

“Myin: hnin yahtā: ye ma ā: tē, lē : myā:mi:-~~pauk~~, amyauk sein than, mye- gyi: ywun hmya…”

（馬と車は数知れず、弓矢の音や mi:-paukの砲声が大地にひびき渡るほどに…）

次いで、1283年には第4度目の事件が起った。それはビルマ軍が中国の国境を侵したことに端を発したのである。この戦闘では、タタール軍はカウンスン (Kaungsin) にてビルマ軍をやぶり、パガンの都にまで迫った。ハーヴィの「ビルマ史」では、この時、タタール兵の猛威はビルマ人の肝に深く徹し、パガン城門を守るナツ神たちが矢傷を負って血を流している姿をビルマ人たちは幻想したほどである、と。(p.53)この大殺戮戦が描かれている。

ナラティハパテ王は数百ものパゴダや寺院を壊して、それを要塞に変え、防いだけれども耐え

切れなかった。王はあわてふためき、タートル軍が実際にパガンを来襲するかどうかを見届ける余裕もなく、金銀財宝や女王、大臣高官等をも王の御座船に乗せたが、女官たちまでも船に収容し切れなかったので、中国軍の手に彼女らを奪われることを嫌い、彼女たちを残らず殺害するように命じたが、高官のなかにはそうすることを忍びず、彼女たちを救ってやるべきであると王に言上し、僧侶の一団に彼女らを託することを許された。かくして、王一行はバセインへ下った。

タートル軍はタヨッモー (Tayok-maw) (ウ・ミンハンの「ビルマ史」ではプロームの南方の地域と記されている。)まで進軍してきたが、食糧が不足してきたため本国へ引き返さねばならなかった。従って、ナラティハパテ王はわざわざ蒙塵してまで王者としての威信を失墜させる必要はなかったのである。ナラティハパテ王が中国軍に追われて逃げたことから王の別名はタヨッピエミン (Tayot-pyē-min:) = 「中国軍に追われて逃げた王」と呼ばれるようになった。

ナラティハパテ王の最後

王はバセインにいる彼の長子ウザナーの元に5ヶ月間ほど留まった後、パガンへ帰ろうと計画した。しかし、将兵たちは都へ帰ることに同意せず、長子ウザナーも末子ティハトウの王に対する*たくらみを案じて、王を引き留めようとしたが、王は聞き入れようとしないので、ウザナーは王の安全を計るためプロームのティハトウを逮捕して足かせをはめた。王はティハトウを足かせをかけたまま、船に乗せて連れ去ろうとしたが、ティハトウは夜に乗じて逃げ、プロームにて兵を集め、城壁を固めた。また一方、ソー女王も王に少数の軍を引いてパガンへ戻っても無益であることを話したけれども、王は聞き入れず、僅かの兵を引いて、ソー女王を連れ、パガンへとイラワザ河をさか上った。プロームの河岸に達した時、ティハトウは王を包囲し、毒皿を送って王に死を強要した。マンナン・ヤーザウィンにはこの毒殺について次の如く記されている。

ソー女王は王に「事ここに到ったのは、わたくしが王に申し上げたことをお聞き入れなさらなかったからです。敵の刀槍にかかり、血に染んだ怖ろしい死に方をなさるよりもこの毒皿を食し、相果てなされた方が王として相応しき最期ではございませんか。」と言うと、王は「我入滅の日まで、幾度生れ変わろうとも、男児を得ることのなからんことを。」と祈って、はめていた指輪に浄めの水をそそぎ、それを女王に託し、毒を食して果てた。

*ティハトウが彼の父王を恨んでいたのは以前、食事の際に他の王子たちの面前にて豚盗人の子と呼ばれて、王に擲揄されたからであった。(学報17号、85頁)

ナラティハパテ王が没したことを知った雲南の軍はパガンを攻め、自らの軍も7千の兵を失ったが、ついにビルマ王国の都パガンを降した。1287年のことであった。

ティハトウは己れの野望を達成せんとして引続きバセインに軍を進めて、病床にあって生命幾

ばくもない彼の兄ウザナーをも惨殺した。それから、もう一人の兄であるダラの太守チョウゾアをも襲ったが、ティハトウの攻撃を前もって知っていたチョウゾアは城壁を固めたため、ティハトウは成功できなかった。まずペグーを占領して、そこからダラを攻めようと計った。しかし、ペグーの太守ンガパモン（Ngapamon, または、Tayā: byā: と呼ばれる）は城にとちこもり、ティハトウに対し挑発的に出たので、ティハトウは怒り、まずンガパモンを撃とうとしたが、戦闘中ティハトウは弓を引き過ぎて誤って自らの矢に当って自滅した。

前述した別名をカラーチャミン（インド人の手にかかって倒れた王〔学報17号、70頁〕）と呼ばれるナラトウ王は父と兄を殺害したと同じように、このティハトウも父と兄を殺害した結果、彼自身も思わぬ最後を遂げた。

チョーゾア王 (Kyawzwa-min:, 1287-1298)

1287年、ソー女王や大臣たちは満場一致でダラの太守チョーゾアをパガンに王として迎えた。ナラティハパテ王がバセインへ蒙塵中、パガンの都は混乱して国中が不穏の状態にあった頃、チョーゾアは王位に即いたが、その頃まで、支配下にあったアラカン、ミッサギリ、パンワー、ペグー、モッタマ、タニンダリー、ジンメ、リンジン、ラワイ、チャインドン等々の各地では公然とパガンに対し反旗を翻していた。そしてビルマ国の領土も以前よりはるかに狭められていた。チョーゾア王は兵を募り、新しく組織を立てようと種々計画をめぐらしたが、困難であった。従って、名目のみパガンの統治者としてチョーゾア王は都の周囲の小区域以上にはその権力が及ばなかった。

このような状態にあったので、各地に反乱が相次いで起った。先づアラカンをはじめとして、西部一帯に勢力をもつミッサギリのテッミヨン・パン・タワーが反旗をひるがえした。それに続いて、ペグーのンガパモンはタヤービャーを号して、反抗の態度を示し、モッタマを支配するワーリールーも、タニンダリー、ジンメ、ゴンピーのチャインドン(地名)、ルーピーのチャインヨン(地名)等々も相ついで反抗の気配を示した。従って、当時のビルマ国は、サルウイーン河以西のシャン州とバセイン及びイラワデー河畔に沿ったビルマ中部地帯がチョーゾア王の支配する王国であった。

シャン族3兄弟のビルマ本土における勢力

ベインナカ (Beinnaka-myō) を支配していたシャン土侯には二人の息子がいたが、土侯が亡くなったので、その長子が後を継いで土侯として支配したが、ある時、彼ら兄弟の間に不和が生じ、弟のテインガボ (Theinggabe) はベインナカの町を去ってチャウセ地方のミンザインの地に達し、ピョー・シャン族 (Pyaw-Shan:) のある富豪の娘と結婚して、そこに身を落ちつけた。

時に1260年であった。

テインガボがこの地を選んだ理由は、彼の故郷をのがれてビルマ側に入った最初の地であり、また、この地には以前よりシャン族が多く住んでいたのも、彼には親しみが感じられたであろうし、さらにまた、ここではチャウセ地帯の米を容易に手に入れることができたからであろうと察せられる。

彼ら夫婦の間に、アテインカヤー (Athingkayā), ヤーザテインヂャン (Yāzathing gyan), *ティハトウ (Thihathū) という3人の男子と1人の娘が生れた。テインガボは3人の息子をナラティハパテ王に預けた。ナラティハパテ王も彼らに情けをかけて、王の元にて任せさせた。娘はナラティハパテ王の末子でプロームの領主であった *ティハトウに嫁がせた。彼ら3人は忠実に王に任えた。ナラティハパテ王の子チョーゾアの御代になってからもよく任えたので長兄アテインカヤーにはミンザインの地を、中の兄弟ヤーザテインヂャンにはメッカヤーの地を、また *末弟ティハトウにはピンレーの地をそれぞれあたえた。そうこうする内に、彼ら兄弟3人は強力な兵と象馬隊をも備えた軍隊をもつようになった。その上、チャウセ運河とその米倉地帯を掌中に収めていたので軍隊への食糧供給の道を確保することができた。

*シャン3兄弟の末弟ティハトウとナラティハパテ王の末子ティハトウとは同名別人であることはもちろんである。

食糧を確保するためには、パガン国にしろ後の Ava にしろ、チャウセ地方を重視したことは当然である。チャンジッターがンガヤマンと戦った時 (学報16号56頁) にも考えられることであるが、歴代の王がこの米倉地帯に目をつけ、9ヶ村の運河工事に重点を置き、その修復を図った。ずっと後にもアラウン・パーやボードーパー等コンバウン王朝の王たちも、また英領時代になってからはイギリス政府もチャウセ地方の豊かな経済力を重要視していた。パガン時代においてこの9ヶ村で産出される米の量は、U Min: Han, p. 139, によれば、年に種子米 (myō: sabā:=seed rice) が2百万 tin: (one tin:=about one bushel) を越え、もみ米 (sabā:=paddy) が9千万を越えたという。

チョーヅワ王は王位に即いて後、やがてソー女王のことを忘れ、彼女と相談もしなくなった。ソー女王もこのように忘れられていることを心よく思わなかった。そこで彼女はシャン族兄弟とひそかに計った。シャン族兄弟はミンザインの地区にパゴダを建てて、その奉献式に王を呼びよせ、ソー女王と計って自分たちを信用させ、王を捕えて無理矢理に僧衣を着させ、寺院に住まわせて警護の兵をつけた。このように王を無理矢理に僧院に閉じこめたことはクンソー・チャウンピュー王の場合にも同じようなことが行われた (学報12号, 108頁)。かくして、シャン兄弟3人が実権をにぎり、支配することになった。

アーサー・フエヤーの「ビルマ史」ではソー女王が野心家として描かれている。彼女はチョー

ゾワ王より権力を奪おうとして機会をうかがいつつ、王の元より離れようと決意した……と記されている（岡村武雄氏訳、86頁）。しかし、この点において、ビルマ人史家の考え方と幾分異なっているように感ぜられる。

ソー女王（Mihpāyā : Saw）は一名ポアソー女王（Mihpāyā: Hpwā: Saw）とも呼ばれたが、彼女はパガンの東方に一つの寺院を建てたが、その村を今日でも彼女の名にちなんで、人々はポアソー村と呼んでいる。ソーニツ王の祖父ナラティハパテ王の妃であったのでそう呼ばれたのである。hpwā: = 「祖母」の意。

ソーニツ王 (Sawnit-min:, 1298—*1325)

チョーゾア王には2人の子があって、長子ソーニツを太子とした。そして、弟のメンシンゾーをタイエツミョーの太守に任じた。

上述した通り、シャン兄弟3人がチョーゾワ王を廃し、ミンザインに閉ぢ込めていたけれども、王の長子ソーニツにパガンにて王位を継がせていた。

ソーニツ王が中国の皇帝に、チョーゾアが廃王にされ、また自分も王の称号をのみもった有名無実の王であることを訴えたため、⁷マンナン・ヤーザウインによれば、中国皇帝は1300年（ビルマ暦662年）、正統の王位を復させるために Than-sein-tein-sin, Yaw-ta-tein-sin, Maw-ta-tein-sin, Maw-ya-peit-tein-sin と云う4人の将軍に中国軍 *約90万の兵をひきいさせて、大挙して来た。(Hman nan: Mahā yāza win Vol. 1, p. 401)

*ソーフニツ王の在位（1298—1325年）の期間に関して、従来のビルマ史家の年代と Dr. Than Tun の論文に発表されたのとはいくらか相異している。後者では（1298—1334年）となっている。

その他、パガン時代の王の在位及びその他の事実についてもタントン氏の論文に書き改めて発表されているので、詳細の年代に関しては氏の最新の論文を参考とされたい。

*「中国軍約90万の兵」は数が誇張されているように思われる。ハーヴィでは、「中国軍1万2千がパガンの復讐を来援した。」と記されているが、後者の方が事実に近いように思われる。ビルマ人によって書かれた王朝史や文学史には余りにも数において誇張され過ぎる点が随所に見られる。

事情を察したシャン兄弟たちは廃王チョーゾアを殺害し、中国軍には、すでに正統のビルマ王位を継ぐ者なしと伝え、チョーゾアの首を示して、将軍たちに贈物をなしたが、その返礼として将軍たちは兵士たちに灌漑用の運河（Myaung: yā）を掘らせて、中国軍はそのまま引きあげた。

従って、この第二次の中国軍のビルマ遠征には戦闘はなく、事件は中国の将軍を饗応することによって落着を見たのであった。

中国軍が引きあげるや、東部及び北部一帯のシャン族、そしてバセインをはじめ32の町に及ぶ

モン・タライン族が反乱を計画しはじめた。

中国軍が引上げて行った後も、国内では混乱をきたしていた。その上、シャン族が入り来って国内に住むようになったので食糧の不足をきたした。このようにシャン族が横行しはじめたのは、シャン族の長であり、ベインナカ土侯の出であるティンガボの娘をナラティハパテ王が彼の末子ティハトウと結婚させたことなどのために、シャン族に好意を示すことを余儀なくされたのであるが、彼らの横暴に甘んじることはビルマ人には耐え得られないことであっただろう。

パガン王朝の衰微

タヨッピエミンの異名をつけられたナラティハパテ王はアノーヤター、チャンジッター、アラウンスイトウ等の如き先王たちの資性を受くることに乏しかったが、彼の死後、その遺産を受け継いだチョウゾワ (Kyawzwa)、ソーニッ (Sawnit)、ソーモンニッ (Sawmonnit) の三代の王はいづれも柔弱であって、これらの王の頃にパガン王朝の勢力は日一日と、水まき魚の如く衰えて行った。この三代の王についてはハーヴィの「ビルマ史」にはその名前すら記されていない。偉大な王は別として、普通の支配者は、ビルマ語で “Aya tat i, atho ma tat” (征服することはできるが、治めてゆくことはできない) と言われる如く、諸々の国を征服しても、それらの領土を手一杯にかかえて、支配する能力に欠いていた。

モッタマでは、北部タイのスコタイ出身であるワーリールー (Warirū) が、また、ペグーにおいてはタヤービャー (Tayā: byā:) がそれぞれ支配していて、モン族の勢力を充実させるべく計画を立て、プローム及びタウンゲー以南は完全にビルマの支配を脱していた。なおその上、シャン族もビルマ国内へ侵入して、大いに勢力を増大する機会を得るようになった。また、ビルマ北部では上述のシャン兄弟がチャウセの米倉地帯を占拠した。かくてパガンは王国なき首都となって行った。

パガン55代、*1368年パガン王朝はついに断絶崩壊した。パガン王国はじまって280年、一王朝の統治としては決して短命ではない。かつてアノーヤター王の建設したパガン王国はその文化の縮図をパゴダに秘めて、今なおその歴史を伝えている。

*パガン滅亡の時期をビルマ人史家のうちにはソーモンニッの死去を以て1368年とする人もあるが、ハーヴィやホールはナラティハパテの最後、即ち1287年としている。事実上、パガンの滅亡は1287年とすべきであろう。なぜならば、1287年以後1555年までが次のアヴァ王朝の時代と見なし得るからである。ただ、パガン王朝もその昔日の面影を失ったとは言え、1287年以後数十年間はお引続きパガン及びその周辺を支配していたのである。

パガン滅亡の原因

通俗的に見れば、パガン国が滅びたのは直接的にはタタール軍、即ち、中国軍の侵略によるも

のであると考えられるけれども、根本的な原因は他にあった。ビルマの諺に言う如く、「棕櫚の実が落ちると同時に、鳥が下りてきて、それを踏む。」(Htan: di: kywe hkaik kyī nin: laik), 即ち、パガン王朝の勢力が衰微しつつあった矢先へ中国軍が侵入して来たのである。その王朝衰微の遠因を探るならば次の事情が挙げられるであろう。

その一つは、各地における農作物の不作がパガンの人々を経済的に圧迫したことである。経済状態が悪化したため食糧が不足してきたことに加えて、シャン族がビルマ国内に入り込んできたため、ビルマの住民にとって益々経済的困窮が増大したのである。

ビルマ国内におけるシャン族氾濫の徴候はアノーヤター王の頃にもそれがうかがわれた(学報第16号51頁)が、彼らシャン族は今度は戦闘に訴えることはせずに、86頁に述べた理由によって、漸次勢力を得つつあった。ビルマ民族がその文化を築いたのはイラワディー河中流に沿った東岸の地域であったが、シャン族がその地域へ達した時、彼らはビルマ人の生活へ入り込むことによって、ビルマ人の食糧問題を益々深刻ならしめ、ビルマ人の彼らに対抗する勢いも弱まって行った。

その当時のパガンの気候が耕作に適していたか否かは別として、パガンを含むミンヂャン地方の土壤は *現在と変らない荒涼たる不毛の地であつたらしい。

*私がかつてミンヂャン地方を通った時、その住民は米の缺乏に大そう困っていた様子であった。住民に事情を尋ねると、その地方は乾燥地帯に属して雨期になっても一滴の雨も降らないため米作には全く適せず、ただ、落花生と綿しか産出されない、それで米は他の地域から送られてきていたのであるが戦争のためそれが途絶されて一そう困っているというのであった。(昭和18年頃)

その当時以前はパガンが住みよい土地であり、かつては“Ye kyī yā, myet nu”(水清き所、草やわらか)な土地として描かれていることより察して決して今日のような所ではなかったであろう。荒涼たる不毛の地になった原因をウ・ミンハンは次の如く述べている。

「パゴダの建立に際し、煉瓦を焼く燃料を得るために森林を濫伐したことがパガンの地の雨量を減じたのではないかと見なされているが、またチャウセ地方における広範囲の灌漑は更にパガンの雨量をそこに吸引する作用をなしたかも知れない。」

アジア歴史事典のパガンの項に、次の如く記されていることも、上述したことと大体一致し得る。

「(パガンの地は) Tattadesa (かわいた土地) とも呼ばれたことから、当時も乾燥地であったことがわかるが、その地に広大な稲田があったことを暗示する碑文等があるので、現在のような不毛地ではなかったらしいといわれる。パガン王朝の下でビルマの首都として発展し、壮麗なパゴダが多く建造され、陽光にはえる金色の塔群は、遠くこれを望見することができたという。し

かし王朝滅亡後、まったくの廢都となり、破損した数百の仏塔が散在して「廢落した仏塔の町」といわれる……」

パガン滅亡のもう一つの原因を考えてみれば、ナラティハパテ王の性格が挙げられる——王として守るべき *Yāzadhan を守ることができないほどに短気であったことが、ついに中国より遣わされた使者を処刑するに到ったため、タタール軍の侵略を招いた。この事は直接の原因に連なるかも知れない。

*Yāzadhanとは Min: kyin tayā: hse bā: と云われ、王として守るべき10個条の義務をいう。即ち

- (1) 布施を行う事。
- (2) 宗教上の5つの戒律を守る事。
(1)不殺生 (2)不偷盜 (3)不邪淫 (4)不妄語 (5)不飲酒食肉。
- (3) 寛 仁。
- (4) 挙動及び言語の柔和なる事。
- (5) 布薩日の戒律を守る事。
- (6) 離 怒。
- (7) 僧侶や国民に逆らわない事。
- (8) 慈 悲。
- (9) 忍 耐
- (10) 正しく歩み行う事。等である (Thute thana thayotpya Abhihān, p.385)

その他、当時遠隔の地にあった支配下の国々が反旗をひるがえさないように、それぞれの国の王妃をパガン王の妃として迎え、王の世継を定めることに王はあまり意を用いなかったらしく、また、当時の世襲制度に従って、能力の欠けた王に国政が委ねられ、その王が偶々専制をほしいままにして、上述の Yāza-dhan を守れなかったことなどがその理由としてあげられる。

そのような種々な事情が絡み合ってパガン王国は亡びたが、“Be thū ma pyu, mi mi hmu” (誰が亡ぼしたというのではなく、自らが招いた滅亡)と言われるのも故なきことではない。

パ ガ ン 王 朝 の 功 績

パガン王国はタタール軍の侵略の前に潰え去ったが、その領土は中国とタイに諷みを通じていたシャン族たちの間で分割され、迫りきたる出血闘争の前に平和は消え去った。しかし、2世紀有余の短命な期間に、最も典雅なる *堂塔伽藍の幾つかを後世に残し、人類の間にかけて行われた最も純粋なる信仰の一つである *Theravada 仏教が今日なお信奉し続けられているのは、どの都市よりもこのパガンの都においてである。

*「堂塔伽藍」は寺院やパゴダを総称してビルマ語では“Zedi pähtō:”と呼ばれているがzediについては学報16号、63—64頁に述べたが、zedi と pähtō: との区別は、“That-pon-abhidhān,” p. 430によれば、“Lain mokh ma pä hlyin zedi, lain mokh pä hlyin pä-htō:…”（その内部に窟堂がなければ zedi で、窟堂のあるのが pä-htō: である…）と記されている。pä-htō: は英語では“hollow pagoda”と訳されている。なお pä-htō: という語はBuddhō: (仏)より派生している。このpä-htō: がはじめて建立されたのは38代タウン・タデー王の時代である。(U Min Han)

*Theravada=上座部,

＜P. Thero=長老, 上座(Sans. sthavira)〔悉他薛羅〕+vādo=説話

“Hlê: win yō: than—ta nyan nyan, Pagan hpâyā paung:”

「牛車の列、騒がしく、パガンの仏塔その数知れず。」

という人口に膾炙せる表現は実に無数のパゴダがパガン歴代の王によって建立されたことを示している。U Min Han によれば (p. 135) その数は4,486,733基と記されているが、戦禍その他の原因で現在でははるかにその数が減じているとは云え、当時でも4百万基以上のパゴダとは誇張し過ぎてはいないだろうか。前述した通り (87頁), しばしばビルマ人の数字は大き過ぎるきらいがある。

当時すでに仏教はその発祥地においてバラモン教のために押しつぶされ、セイロンにては数度その生存が脅かされ、またビルマ以東の諸々の地においては僧侶の腐敗墮落から脱し切れなかった。しかしビルマの歴代諸王はその信仰において決して揺れることなく、法難の後の仏教はパガンにその安住地を見出したのである。実にパガン朝のビルマは仏教王国であり、建寺王朝の名にふさわしく、数多くのすばらしい仏塔寺院をイラワディ河畔に残した。その主なるものは、Shwezigon, Shwesandaw, Ānandā, Thatbyinnyu, Shwegu, Gawdaw pallin, Silāmani, Mingalazedi, Mahābodhi, Bū: (遙かに古いもの) 等であって、今尚その偉観を示している。ビルマにおいて小乗仏教が今日もなお長く法燈をついで厚く信奉されていることもパガン朝の功績に帰すべきであろう。

当時の文学について

次にパガン時代の文学を極めて簡単に概観しよう。パガン時代はビルマ文学の黎明期とも云うべく、先づ散文にて書かれたものが現われ、その後、短い詩や韻文が現われはじめた。散文の中には碑文が大部分を占めているので、パガン時代は碑文時代とも呼ばれる。その時代の碑文に書かれたものには短かく簡潔に表現されたものが多く、後世のビルマ文学作品に見られるような誇張した遠廻しの表現は用いられなかった。碑文のうちで Mya Zedi 碑文が最も貴重であることは云うまでもなく、その石柱碑文の寄進者はヤザクマールである（詳細は学報16号、65, 66, 67

頁参照)。

ナラパティシート王の時代に、前述した通り、シンターリポッター僧正による “Dhamm-a-wilātha Dhamma-that” が適切な流麗なビルマ語の散文で書かれている (学報17号, 76, 77 頁)。Dhamma-that (法典) はその外に, “Manaw-thāra Dhamma-that (ピューソーティ王の時代に書かれた), Alaung: sithū Hpyat-hton:, Nan: taung: myā: min: Hpyat-hton:, Thihapathe min: Hpyat-hton:” 等も書かれている。

詩としてはティレチャウン王の時代に書かれたと信じられている作者不明の “Poppa Nat-tau-ng bwè lingā” (ポッパ山のナツ兄妹を歌った詩) (学報12号, 104頁), また, ナラパティシート王の時代にアナンタトウリヤ大臣が王に献上した “Myet-hpye-lingā” (怒りを鎮める詩) は特に有名である (学報17号72, 73頁)。これら2つの詩のうちで後者は a-hkyi……a-hkya (詩の始めの部分から終りの部分まで) を見れば yatu 詩に大そう似ている。yatu は作者に関する事柄, 諸々の儀式, 仏教, 男女のローマンス, 山や森の自然等を歌った一定の型式をそなえた詩である (yatu については後述する。)

当時は僧侶で学問に志す者が多かった。それは恐らく, アノーヤター王が仏典保存所を設けて, そこで僧侶たちにモン語よりビルマ語に訳させたり, 仏典を深く研究することを奨励したこと等の事情もあって僧侶の中に学者が多かったが, 王として学問に励んだ人は50代のチャゾワ王で三蔵経を9回も通読したと云われている。彼は宮廷人たちに物質界と精神界を見きわめることを悟らしめ, 彼らのために “Paramatta-Bindu-kyan:” 及び “Sadda-Bindu-kyan:” とのその註釈書を書いた (学報17号, 81頁)。また, チャゾワ王の時代に, “Myakan-bwè-lingā” という有名な詩が書かれている。また, 古く11代の Thāramonbyā: 王の時代に “Manu-Dhamma-that-lingā” という詩が現われたことも知られている。

当時の服装について

前号の「パガン時代」の中には全くふれていなかったのが, 当時のビルマ人の服装についてすこし述べておこう。Dagon Nat Shin 著 “Myanma yō: yā hsin tan hsā”, p. 12—13 に次の如く記されている。

「ビルマの伝統的な服装はパガン時代にはかなり優雅なものであって, 男子の身体の上部には Yin-hlwan-duyin (胸を覆うた下着) と Apaw-yon (上衣) を, そして下半身には Hkā:-wot-pahsō: (腰に巻きつけるロンデー), Hta-mein (一種の袴), 及び Hkā-din (袴をたくし込むための胴締め?) 等を着用していた。

ビルマでは服装は支配階級である王族及び宮廷人の着用するもの, 商人や農夫等一般庶民の着用するもの, と軍人兵士たちの着用するもの等に分けられていた。従ってそれに適するように服装の呼び名も種々あったものだ。」

王族や宮廷人の間では服装に関して階級的にきびしく区別されていたらしいことが次のことから察せられる。即ち、アラウンシート王の長子ミンシンゾーは父王の側室の子であるアナンタトウーリヤが王より賜った王家着用の衣を着て式典に列するのを見て、その階級に適さない衣服を着ているという理由で彼にそれをぬがせたことがあった（学報16号73頁）。

私の感じでは、ビルマ人は他の人と同じ服装をするのを好まないところがあるのではないか。自分だけはどこか他の人と変ったところを認めてほしいというような態度を見せたがるらしい。また、兵士や警察官のように制服を着なければならない人々でも自分だけは他のそれらの階級の人々とはちがっているのだというところを服装のどこかに表わしたいというところがあるように見受けられる。従って普通のビルマ人は服装その他のことで派手に振舞うことが多く、そのことをビルマ語では“Han kyī: pan kyī: lot̃di”という。

パガン時代の女性が着用していたものは上部には“Sulyā:”と呼ばれる装飾的な衣装と、下部には“Htamein”という袴に似たものであったと云われている。当時のパガンではパーリー時代とも云われるほどに衣装の名を呼ぶのにもパーリー語が多く用いられた。例えば、上部に着るものを“Pāwāro, Uttarāsingo, Upasabyānan, Uttaran, Uttariyan”等のパーリー語で呼んでいたそうである。

スリヤーは結婚式の時によく着る衣装で、“Sulyā: pat”（スリヤーにて〔身体を〕巻く）とは「結婚する」ことを意味する。スリヤーは長い衣装であって、花嫁花婿を並んで坐らせ、二人をスリヤーで巻き込み夫婦の契りを結ばせるのである。（That-pon Abhidhān, p. 257）

Sulyā: <su=hka[?] su su（やや全部、種々称々）+lyā:=she（長い）

Sulyā: の呼び名も種々あって、“Bhwè hpyū, Bhonpatī: Patī:, Dukūla, Pissū, Wattha（パーリー）、Dussa（パーリー）等とも呼ばれていた。（Tekkatho Myanmā Abhidhān, p. 567）当時の Htamein は現在のそれとは大分ちがっていたらしい。農夫がはいっているものにやや近いようである。“Pathingawitho dhanī-that-hnyon:”という書物では、下部に着るのを htamein といひ、上部を纏うのを htabhet と呼んだ。両方の語とも純粋なビルマ語であると記されている。

Tamein という語は htabhī >htamī > htamein と変化し、現在でもビルマ文字を使用する場合は htabhī または htamī と綴る。hta=hta thaw a-hkā（起きる時）+bhī=hantā: gyin: または kāhsī: gyin:（進行をさまたげる、防ぐ）の意である（That-pon-Abhidhān, p. 467）から、日本の「袴」を想像すればよいと思う。

なお htamein についてはアヴァ王朝時代の項にても後述する積りである。

パガン後期時代の記録の中に htamein-hnī:, htabhet-hnī: の如く、hnī: という語が時々見出されるが、この語は衣服や布切れの総称であって、次のような語にも用いられるようになった。hkin:-hnī:（敷物）、let-hnī:（ナブキン、または、ハンケチ）、mō:-hnī:（雨降りに頭を覆う布）、a-hnī: または, kalē:-a-hnī:（子供を寝かす敷物、または、赤ん坊のおむつ）、sī:-hnī:（乗馬の際、鞍の上に敷く布）等の言葉の中には現代語として用いられているものもある。これらの語から推

測できる通り、hni: は動詞として用いられる時は「広げる」を意味する。

いかなる文化にしる、それが生れ育くまれた風土と結びついていないものはない。代々受け継がれてきた文化が土台となって、その上に新しい文化が発達し、やがては伝統の花が美しく咲き誇るのである。パガンに見られる幾多のパゴダには、ビルマ民族の性格が如実に反映されている。また、ビルマの現代小説や劇、建築、音楽、舞踊、式典の服装などにも古来ビルマの伝統が生きている。過去の文化遺産が現代にもその生命を保ち続けて、ビルマ人の精神生活を豊かにしている。

参 考 文 献

- U Hpo Kya : Myanmar Yāzawin Akyin; 1937
U Min Han : Myanmar Naingnandaw Hket-laik Yāzawin, 1937
U On Maung : Myanmar Yāzawin Thit, 1953
G.E. Harvey ; Outline of Burmese History, 1947
Hmannan : Mahā Yāzawin, Vol.I
U On: Shwe : That-pon Abhidhān, 1956
U Hpo Lat : Thute thana-tha yot-pya Abhidhān, 1955
高楠順次郎著 巴里語, 仏教文学講本字書
アーサー・フェヤー } ビルマ史, 昭18年
岡村武雄 訳 }
D. G.E Hall : Burma, 1950
U Hpo: Ngwe: Tan; myin-gabyā-hpwè-ni : kyan;, 1955
Dagon Nat Shin : Myanmar Yō: yā Hsin tan-hsā,
U Won ; Tekkatho Myanmar Abhidhān, 1963
アジア歴史事典「パガン」の項